

徳島市 常三島遺跡

—埋蔵文化財発掘調査実績報告書 99年度—

徳島大学南常三島団地 共同溝Ⅱ-1・2区

2000年7月31日

徳島大学施設委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

目次

- 1 調査地の名称と目的
- 2 調査地
- 3 調査期間
- 4 調査面積
- 5 調査体制
- 6 調査にいたる経過
- 7 II-1区における発掘調査の成果
- 8 II-2区における発掘調査の成果
- 9 まとめ

第1図 常三島遺跡の位置

第2図 江戸時代徳島城下町と常三島

第3図 調査地の位置

第4図 調査遺構平面図 共同溝II-1区

第5図 調査遺構平面図 共同溝II-2区

第6図 常三島の絵図と調査地

図版1 II-1区 第1遺構面全景：南半部遺構検出状況

図版2 II-1区 南半部遺構掘り下げ状況1：南半部遺構掘り下げ状況2

図版3 II-1区 北半部建物（門）柱穴：柱穴：井戸掘り下げ断面状況

図版4 II-1区 第3遺構面南北溝：屋敷境部大型土坑（SK04）

図版5 II-2区 第1遺構面全景：B-C地区屋敷境付近遺物出土状況

図版6 II-2区 C地区遺物出土状況（一部）：第1遺構面掘り下げ状況

図版7 II-2区 第2遺構面掘り下げ状況（北より）：第2遺構面掘り下げ状況（南より）

図版8 II-2区 C地区南北大溝内木樋状遺構：南北大溝床面および桶

図版9 II-2区 第3遺構面掘り下げ状況：作業風景

1 調査地の名称と目的

常三島遺跡

徳島大学南常三島団地 共同溝Ⅱ-1・2区

共同溝敷設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査

2 調査地

徳島市南常三島町2-1

3 調査期間

平成11年7月5日～平成12年5月26日

4 調査面積

Ⅱ-1区 171m²

Ⅱ-2区 300m²

5 調査体制

調査主体 徳島大学施設委員会

委員長 齋藤史郎（徳島大学長）

調査担当 徳島大学埋蔵文化財調査室

室長 北條芳隆（総合科学部助教授）

発掘担当者 調査員：橋本達也（総合科学部助手）

技術補佐員：山本愛子 久米（上田）淑子 岸本多美子 井本尚子
安山かおり（施設部企画課）

6 調査にいたる経過

古文書や江戸時代に描かれたいくつかの絵図などから常三島（現・徳島市南常三島町）は徳島城下町の武家屋敷用地として確保され、整備された土地の一つであることが判明している。それらの資料によると、現在の徳島大学キャンパス内では家老クラスから下級武士まで様々な武士が住んでいたことがわかる。

常三島ではこれまでに徳島大学工学部構内において、地域共同研究センター、光応用工学科棟、工業会館、サテライトベンチャービジネスラボラトリー、総合情報処理センター等の大学教育研究施設の建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施し、近世武家屋敷を中心とする良好な遺構の存在を確認している。よって、調査以前から他地点同様、共同溝Ⅱ期発掘調査地点に近世遺構が良好に遺存しているものと予測され、発掘調査を行うこととなった。

調査は作業工程上、北半をⅡ-1区、南半をⅡ-2区と分割して行った。

発掘調査は近代造成土の掘削を重機で行い、その下の江戸時代包含層を人力で掘削した。

Ⅱ-1区における重機掘削は平成11年7月5日～6日、人力掘削は平成11年7月8日～10月1日まで行った。

Ⅱ-2区における重機掘削は平成12年2月15日～2月17日、人力掘削は平成12年2月15

日～5月26日まで行った。

江戸時代遺跡の発掘調査 従来、江戸時代の歴史研究においては豊富な文献資料の存在から、これに基づく研究が主で、発掘調査にもとづく考古学的な研究は部分的なものではなかった。しかし、近年、江戸時代の歴史研究においても文献資料以外に考古学資料が重要な役割をもっていることが認識されつつある。遺跡は発掘調査を通して当時の生活の具体的な物的証拠を考古資料という形で与えてくれる。日々の暮らし、土木・建築技術、様々な工芸技術、物品の流通、宗教、遊びなどモノを用い、痕跡を残す様々な場面において考古学的研究は有効である。日本社会史の実像復元において江戸時代の生活・文化の考古学的研究は今後一層重要性が高まるものと思われる。

常三島遺跡の発掘は、徳島という地方都市の歴史的発展過程やその地域色、そこに暮らした人々の生活の歴史などの解明に重要な役割を担っている。徳島では常三島遺跡のほかに徳島県教育委員会による新蔵町1・3丁目遺跡、中前川町2丁目遺跡の武家屋敷や徳島市教育委員会による徳島城・福島2丁目の武家屋敷などにおいて近世遺跡の発掘調査が行われ、次々と重要な成果が明らかにされつつある。全国的に見ても今後ますます近世の考古学的研究の成果が期待されている地域であり、なかでも継続的な発掘調査が集中的に行われている常三島遺跡の調査成果に期待される場所はきわめて大きい。

常三島の歴史環境 常三島ではこれまでのところ江戸時代以前の遺構や遺物は見つかっていない。今後、確認される可能性はあるが、江戸時代以前には人の生活できるような状況ではなかった可能性がある。江戸時代の包含層を取り除くと、すぐ下は砂層で地下水が沸きあげ、江戸時代以前は三角州であったことがわかる。砂の上に広大な範囲にわたって粘土を張り、屋敷を築くということは、事業を推進する大きな政治力と高度な土木技術とが備わった江戸時代になって初めて可能となったものと思われる。

常三島は江戸時代の武家社会と一体の土地であった。そのため、江戸時代を通して武家屋敷として利用され続けるが、明治時代の幕開けとともに武家社会は解体され、武士は従来の武家屋敷からも離れなければならなくなったようである。遺構や遺物も幕末期までのものがほとんどで、明治になると武家屋敷は壊され、その後、1922（大正11）年に徳島大学工学部の前身、徳島高等工業学校が創設されるまで、常三島は農地などとして利用されたようである。

7 II-1区における発掘調査の成果

遺構の概要 検出された江戸時代遺構面は大きく3面に分けられる。おおむね第1遺構面は江戸時代後期（18世紀後半～19世紀）、第2遺構面は江戸中期（18世紀前半～後半）第3遺構面は江戸前期（17世紀～18世紀前半）と考えられる。第1遺構面はT.P.0.20m付近、第2遺構面はT.P.0.10～0.00m付近、第3遺構面はT.P.-0.10～-0.20m付近である。最も遺構数が多いのは第1遺構面である。古くさかのぼるにつれ遺構・遺物量は少なくなる。

調査地点は光応用工学科地点などこれまでの調査成果や絵図等の検討から徳島藩士の屋敷表部分と屋敷境部にあたることが想定されていた。発掘調査の結果、調査区内で屋敷境部と屋敷表の構造の一部が確認できた。

検出遺構	建物（門）	1基
	柱列（柵）	1基

土坑	約40基	
溝	5基	
石組み遺構	4基	
石敷き遺構	1基	
井戸（桶）	5基	など

第1遺構面 調査区北半では南北に直線的に列ぶ柱の抜き取り穴と考えられる遺構やその他の土坑を確認した。この柱穴からなる建物の東西方向への広がりとは不明であるが、絵図による復元に基けば武家屋敷A地区の屋敷表中央付近に位置することから門である可能性が考えられる。この門の北側、調査区北端付近には土坑が数基存在する。

また柱穴列の無くなる位置より南側はきわめて多くの遺構群が形成されていた。ここでは重複して何度も掘り返しや遺構構築を行っており、これら遺構は複雑に切り合っている。そのため、はじめ上面では遺構の輪郭を確認することが全くできないほどに密集した状態で検出された。掘り進むに従い重複する複雑な遺構からなることを確認した。主としてここには、小型池状の石組み遺構3基、幅約4.5mにも及ぶ石敷き遺構、瓦溜まり等の土坑群などが営まれていた。屋敷表の一部でありながらきわめてきわめて乱雑な使用状態で遺物も大量に出土した。

この遺構群の南端付近には柱穴と考えられる遺構が東西方向に列んで存在する。ここより南側には大型の土坑などは見られない。また調査区東辺に添って南北に石組みの遺構が存在する。この石組み遺構は本調査区隣接地で以前に行った立会調査や後述するⅡ-2区の調査成果を合わせて考えると屋敷表に存在する石組み溝であると考えられる。これら成果や絵図などを合わせ考えるとこの石組み溝がはじまり、東西方向に柱穴列などが存在するあたりで屋敷境となり、武家屋敷B地区になるものと考えられる。

第2遺構面 調査区北半部において南北に列ぶ柱穴列が確認できた。第1遺構面で確認した門と考えられる遺構の下半部と考えられるが、慎重に掘り下げたものの柱の掘り形は不明瞭であった。

柱穴は南北5間と見なされるが、あるいは攪乱によりもう一間南へ延びる可能性がある。また柱間は若干の誤差を含むが、1間=197cmと見なしてよいようである。

建物（門）より南側は、土抗等多くの遺構が確認された。中には巨大な土坑や井戸などがある。また第1遺構面と同様B地区では遺構数がきわめて少ない。

ここで第2遺構面としている面は様相としては第1遺構面とした遺構より古いものを含んではいるが、むしろ第1遺構面下半とすべきものを多く含んでいることは間違いない。今後出土遺物等の詳細な検討が必要である。

第3遺構面 遺構数は少ないが屋敷の区画にかかわると考えられる溝などが確認された。調査区北半では門を構成すると考えられた柱穴列に併行する形で南北方向の溝が確認された。この溝は門より南側までは伸びず途切れ、その南側には少し間隔をあけて、東西方向の溝が存在する。この2本の溝は屋敷内の表部を区画するものと考えられる。

また、A地区の南側では井戸を1基確認した。B地区では溝1本を確認した。

武家屋敷の居住者 絵図・文献等の記録と合わせて分析した場合、発掘調査によって確認された2つの屋敷地の居住者は、以下のように推定できる。屋敷は年代によって居住者

が異なっており、その石高・役職等は宮本武史『徳島藩士譜』より抜きだし、一部は『阿州徳島藩御家中録』などによった。

なお、屋敷居住者は各年代の絵図により判別した。今回、確認した年代は以下の①～④である。

①安政年間(幕末) ②天明年間(18世紀後半) ③享保年間(18世紀前半) ④元禄4年(1691)

〈A地区〉

① 牧(梶五郎)家=藩士譜記載無し。150石(分限帳)。嘉永3(1850)年鳥山家と屋敷替え。佐古大裏町より転居(家臣成立書)。文政年間=牧彦兵衛-4人半扶持内蔵米50石、180石(御家中録)。享保17年=牧彦之進-150石(屋敷録)。

② 鳥山(茂弥)家=寛永11年召出。200石。長江組・賀島組など、奥御小姓役、御広間御番、書附入土蔵御番、大森警衛御用、江戸警衛御用。

③ 藤川(安右衛門)家=藩士譜記載無し。

④ 藤川(近右衛門)家=同上。

〈B地区〉

① 真鍋家(芳太郎)=九代藩主至央、付人ののち、宝暦4年150石にて召し抱え。奥御小姓役、西の丸御番、ほか屋敷御番、佐渡小文次組など。

② 山下(與蔵)=1620~1650年の間に召出。7人扶持10石~10人扶持15石。琵琶法師、御広間御番、道御奉行、左京様・若狭様御用など。屋敷替え後、存続。

③ 山下(安之右衛門)=同上。

④ 今津(弥右衛)=藩士譜記載無し。

遺物の概要 屋敷境付近の遺構群を中心として大量の遺物が出土した。最も主要な出土遺物は陶磁器である。その産地は肥前・瀬戸・京・信楽・備前などの広域流通圏をもつ製品と大谷焼などのように在地で作られ、狭い範囲でのみ流通したと考えられるものがある。陶磁器以外には金属製品・木製品・漆製品などが多数出土している。

出土遺物数	陶磁器類	コンテナ	73箱
	木器・漆器類	コンテナ	27箱
	瓦	コンテナ	126箱
	金属・ガラス・石製品類	コンテナ	2箱
	食糧残滓(貝・魚骨)	コンテナ	6箱

8 II-2区における発掘調査の成果

遺構の概要 検出された遺構面はII-1区と同様に大きく3面に分けられる。おおむね第1遺構面は江戸時代後期(18世紀後半~19世紀)、第2遺構面は江戸中期(18世紀前半~後半)第3遺構面は江戸前期(17世紀~18世紀前半)と考えられる。第1遺構面はT.P.0.00~-0.10m付近、第2遺構面はT.P.-0.10~-0.15m付近、第3遺構面はT.P.-0.20~-0.30m付近である。第1遺構面が遺構・遺物ともに最も多く、古くさかのぼるに従って遺構・遺物量は少なくなる。

調査地点は光応用工学科地点、機械工学科地点などこれまでの調査成果や絵図等の検討から徳島藩士の屋敷表部分と屋敷境部にあたることが想定されていた。発掘調査の結果、調査区内で多量の遺構遺物が出土し、屋敷境部と屋敷表の構造の一部が確認できた。

検出遺構	土坑	約50基	
	溝	12基	
	井戸（素掘り）？	1基	など

第1遺構面 調査区中央で土手に囲まれた南北の大型の溝が確認された。この溝の存在する地区、それより北の地区、それより南の地区の3地区に分けることができる。Ⅱ-1区とのつながりから考えて、中央の大型溝の存在する地区より北がB地区のつづき、溝・土手の範囲がC地区、南をD地区とする。

B地区ではⅡ-1区に引き続き、調査区東辺に添って屋敷表を区画すると考えられる石組み溝が出土した。またB地区内の南寄りでは南北から東西に折れ曲がる屋敷内の区画に関連すると見られる溝を確認した。また、北側に瓦溜まり等の大型土坑が存在した。

C地区では屋敷表を巡ると思われる南北の大型溝を確認した。この溝を土手が取りまいている。溝は調査区外側にまで広がり幅は不明であるが、おおむね全幅の2/3程度は調査区内に入っているものと考えられる。全長は22.6mに達し、深さ1.15～1.35mを測る。幅は現状で3.6mまで存在し、おそらく復元幅は推定で4.6～5.6mに達するものと見られる。土手は精選された整地土で構築されている。現状で上幅1.0～1.2mをはかり、さらに調査区外東に広がる巨大な構造物である。南北大型溝を取りまく北側と南側の東西土手は上幅で1.2mを測る。

D地区では屋敷境部を除いて全体に土坑などが疎な状態で確認されたにとどまる。C地区との屋敷境部では土手の南側に東西方向の大型の溝を掘り境構造とする。この溝ははじめ大型のものであったのが、のちに若干北にずれたC地区との境土手上に掘りなおされている。その屋敷境溝の最大幅は3.2mに達する。そのほか屋敷利用との関係で性格の判明する遺構はとくに確認できなかった。

第2遺構面 B地区では、その南側で屋敷内区画の溝と考えられる南北方向から東西方向へ折れ曲がる溝の下層部をとらえた。そのほか北側では一部土坑などを確認した。おおむね遺構のあり方は第1遺構面で確認した状況と変わらず、屋敷地内の土地利用が一定期間継続的に行われていた状況がうかがわれた。屋敷内区画溝は幅1.0～1.2m、深さ0.4～0.5mを測る。

C地区では遺構の状況は第1遺構面と変わらない。土手部の上層整地部分を掘り下げ、また大型溝の堆積層を掘り下げた。大型溝の堆積には大きく分けて2ないし3段階存在し、出土遺物などの詳細な検討は未だ行っていないが下層部の状況から見て、この溝の掘削が第2遺構面相当にまでさかのぼる可能性を考えている。

D地区では引き続き東西方向のC地区との屋敷境溝の下層部が確認された。幅3.2m、深さ0.7mを測る。またほかに第3遺構面となる可能性があるが、屋敷表部の区画にかかわると考えられる南北方向の溝も確認した。そのほかには第1遺構面同様、若干の遺構は確認できたが屋敷利用にかかわると判断できる遺構はとくに確認できなかった。

第3遺構面 B地区では北端部で大型の土坑、2基が確認できた。そのうち1基はきわめて深く湧水層に達し、素掘りの井戸、あるいは井筒を抜き取った井戸か大型のゴミ穴の可能性を考えている。またB地区中央やや南よりの位置でも大型の土坑を確認した。

C地区は大型溝が構築されているため、他の遺構は確認されず第3遺構面相当の時期については判断できない。出土遺物の検討により第3遺構面相当期にすでに大型溝の存在し

たか明らかにできる可能性があるが、それ以前に存在した遺構を壊してのちに大型溝を構築した可能性もある。

D地区は第2遺構面で検出した南北溝が第3遺構面にさかのぼる可能性があるほか、わずかに区画溝となる可能性もある遺構が若干存在するのみである。南北溝は幅1.0～1.35m、深さ0.5～0.6mを測る。

屋敷の居住者 ①～④はⅡ-1区と同じく絵図などの資料から判断した各時期の屋敷の居住者である。住人の詳細は同じく『藩士譜』に基づく。

〈B地区〉 Ⅱ-1区と同じ。真鍋、山下、今津家屋敷。

〈C地区〉

- ① 佐野（玄真）家＝明暦3年召出。7人扶持15石～7人扶持20石。代々医師。
- ② 佐野（證意）家＝同上
- ③ 佐野（端悦）家＝同上。享保2（1717）年、高木弥兵衛と屋敷替え。
- ④ 高木（勘右衛門）家＝1620～1652年の間、召出。150石。西の丸御番、各郡代など。

〈D地区〉

- ① 近藤（平右衛門）家＝名西郡轟城主子孫。1585～1600の間に初召出。はじめ32石、のち13石。代々、検見役。
- ② 近藤（弁作）家＝同上。
- ③ 川端（平右衛門）＝藩士譜記載なし。
- ④ 川端（伝右衛門）＝同上

遺物の概要 屋敷境付近の遺構群を中心として大量の遺物が出土した。なかでもC地区の南北大型溝は大量の遺物を包含しており、今次調査の出土遺物中の大部分を占める。

最も主要な出土遺物は陶磁器である。その産地等の状況はⅡ-1区出土資料と大きな差はないであろう。同様に陶磁器以外には金属製品・木製品・漆製品などが多数出土している。また、なかでも注目できる資料として木簡があげられる。総数は7点ほどである。そのうちC地区の大型溝出土木簡の1枚にはC地区・佐野家の向かい側にある民澤家より投棄されたと見なされるものもあった。ほかにも同じ溝から瓶底に佐藤家の名前を記すものがあり、民澤家北隣の佐藤家からも佐野家の溝に投棄の行われたことが確認できた。

木簡	民澤作右衛門様	山本三次郎	
	塩鱈式□書状箱添		: 鱈は鱸の可能性もあり; □は貫か
瓶底墨書1	八ケン丁 一三	佐藤	
瓶底墨書2	佐藤氏	佐藤氏	

出土遺物数	陶磁器類	コンテナ	140箱
	木器・漆器類	コンテナ	70箱
	瓦	コンテナ	175箱
	金属・ガラス・石製品	コンテナ	11箱
	食糧残滓(貝・魚骨)	コンテナ	1箱

9 まとめ

常三島遺跡では今回の調査以前にこれまで9次にわたる発掘調査を実施してきた。しかし、それらの調査地はいずれも武家屋敷裏側を中心としており、屋敷内部の使用状況について、武家屋敷の主要な利用空間となるべき屋敷表や屋敷本体の構造は不明瞭なままであった。

今回の調査では面積も限られ、調査区平面形の都合上、部分的な調査とならざるを得なかったが、武家屋敷4軒分にわたって屋敷表の調査を実施することができた点で重要な成果である。

しかもその状況を見ると、上に詳しくふれたように同じ並びの屋敷であっても各屋敷によって表付近の構造も異なっていることが確認できた。門を持つ屋敷、溝で区画する屋敷、巨大な溝（堀）を持つ屋敷といった状況である。

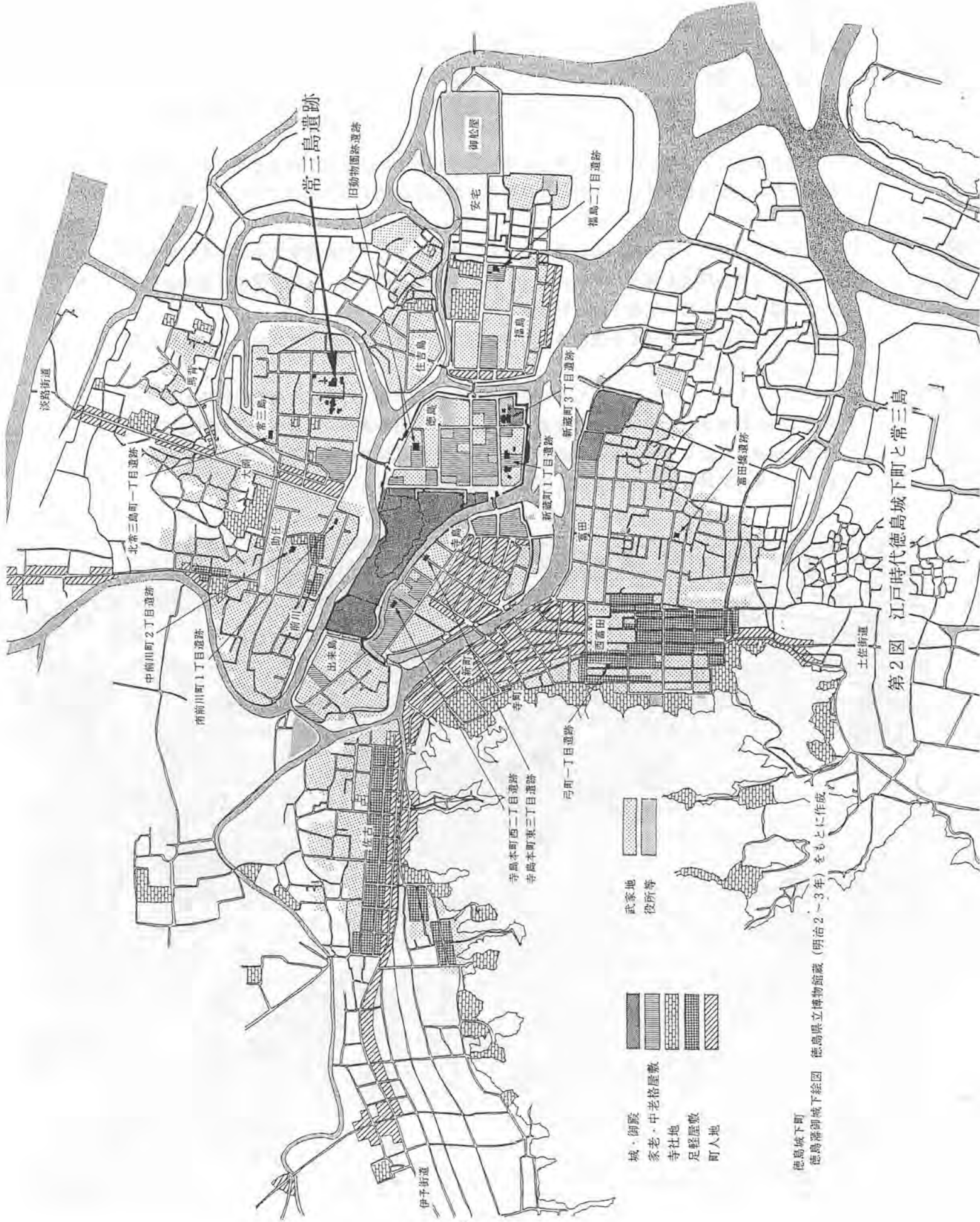
また屋敷表付近であっても遺物等を埋めた穴、すなわちゴミ穴と考えられる土坑は少なくないことも注目できる。

とはいうものの、今回においてもいまだ屋敷内部の構造との関係や屋敷地内の利用状況を具体的に把握する上では十分な成果とは言えない。また遺物の分析は今後の課題で流通構造、地域の特徴などの検討が必要である。まだまだ重要な検討課題が多く山積しており、今後の継続的な発掘調査および整理作業が必要である。



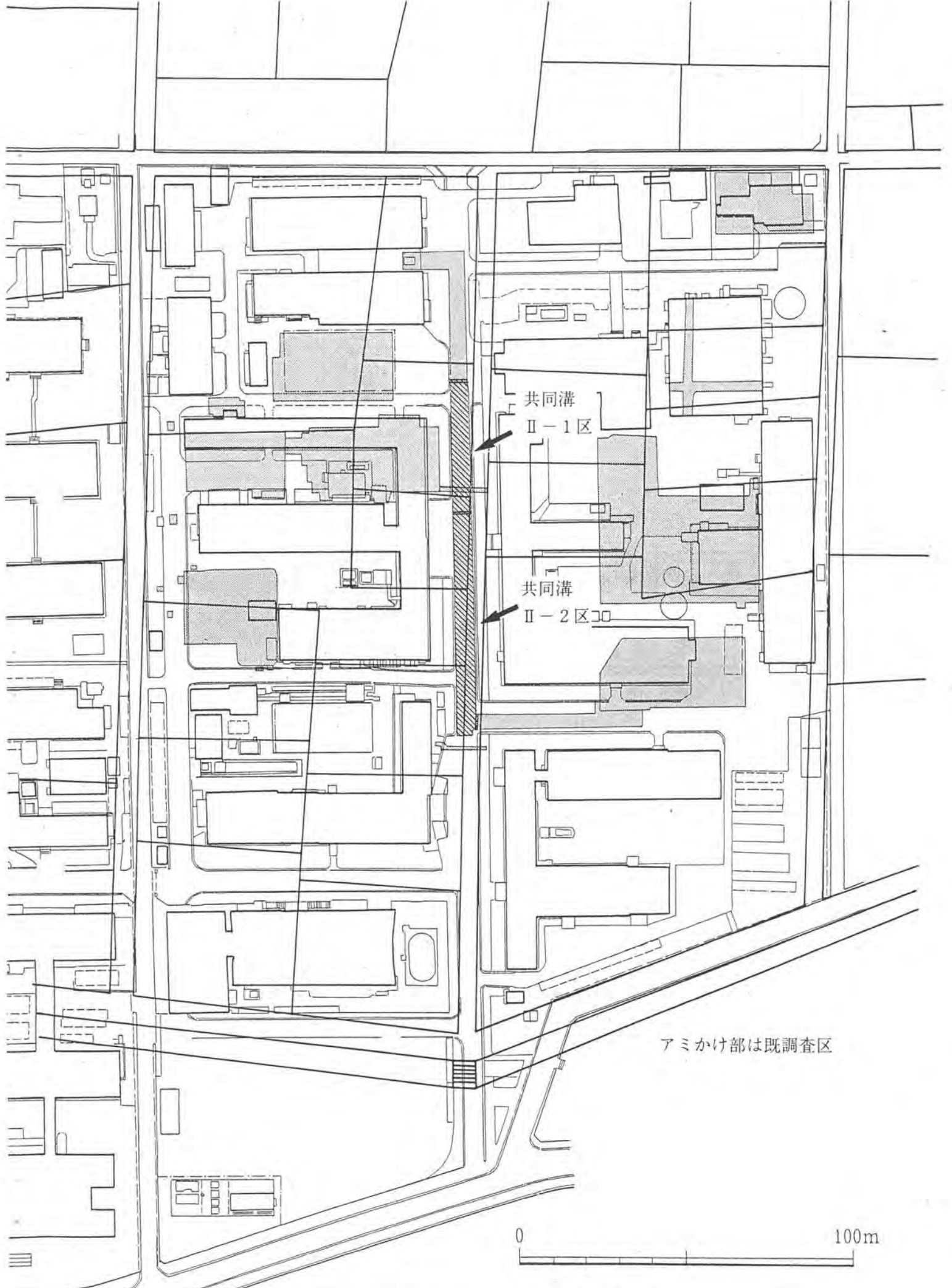
第1図 常三島遺跡の位置

国土地理院 1/25000「徳島」をもとに作図



第2図 江戸時代徳島城下町と常三島

徳島城下町
徳島県立博物館蔵 (明治2~3年) をもとに作成



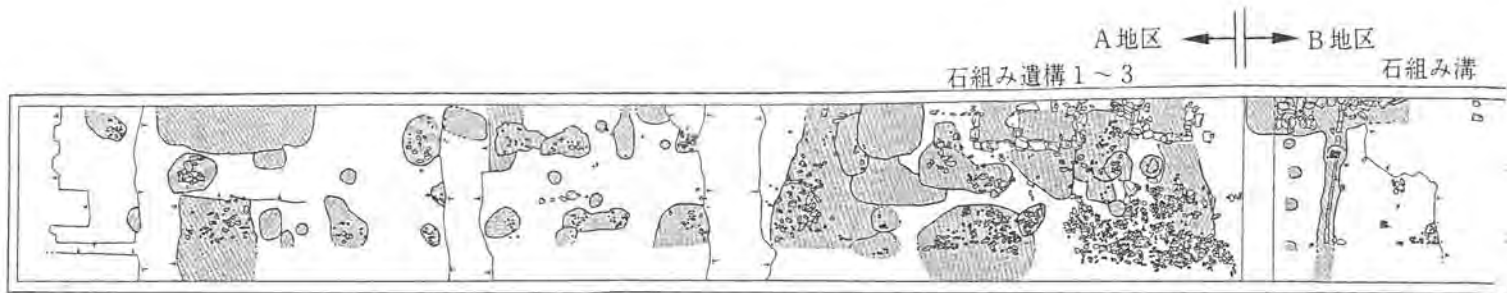
共同溝
II-1区

共同溝
II-2区

アミかけ部は既調査区



第3図 調査地の位置 徳島大学常三島地区平面図



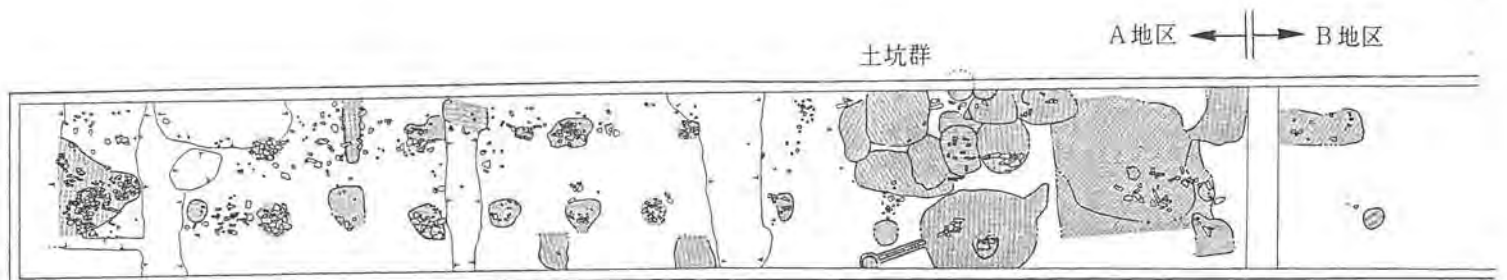
建物 (門)

土坑群

石敷き遺構

暗渠

第1遺構面

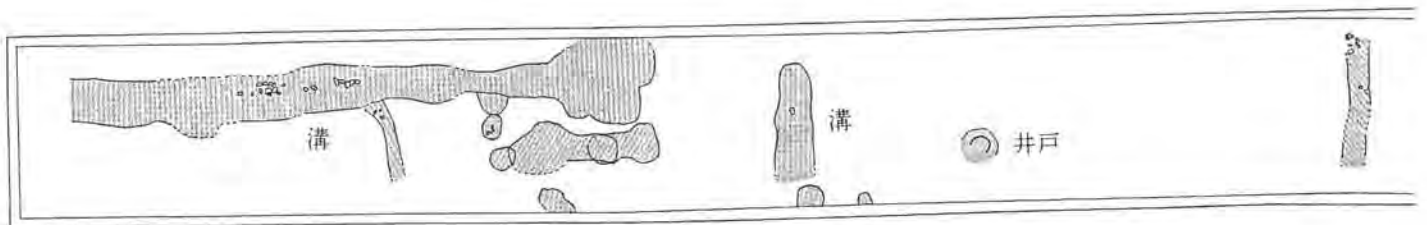


建物 (門)

土坑群

井戸

第2遺構面

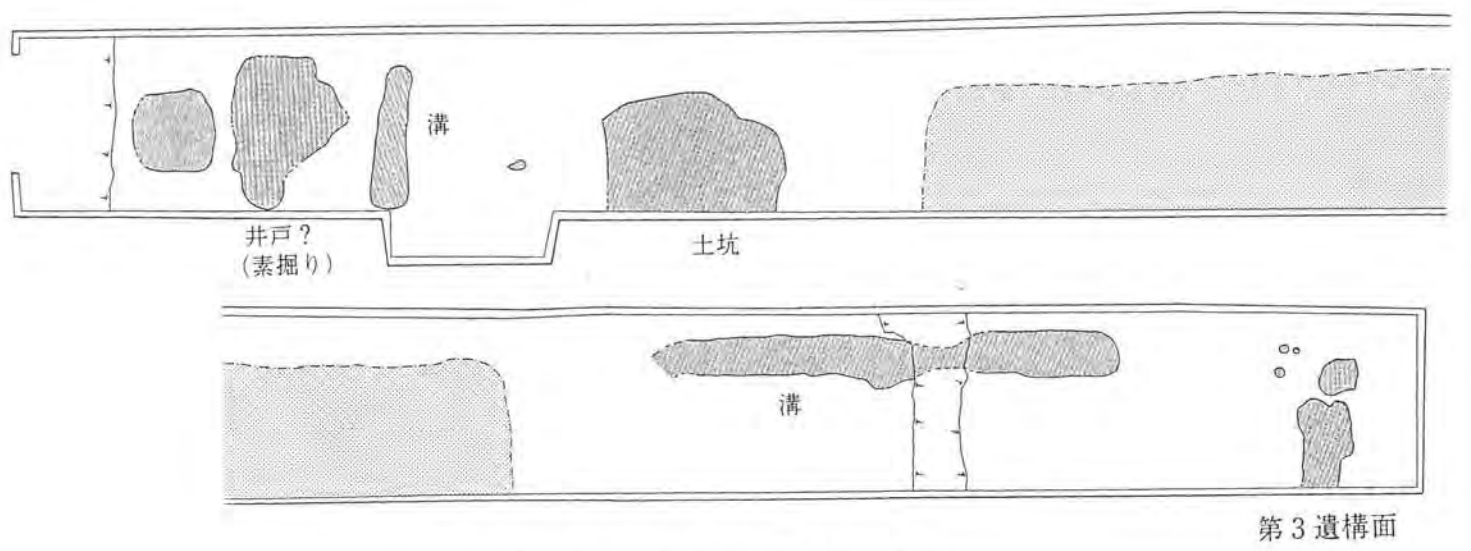
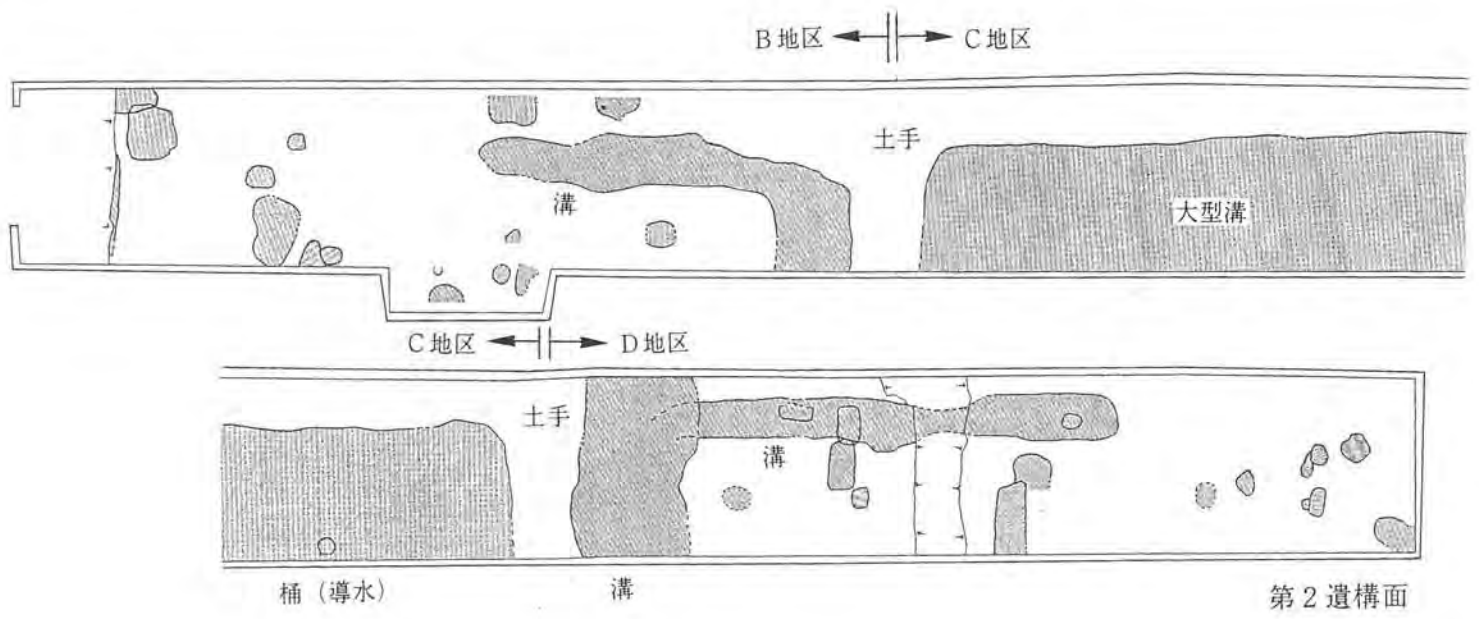
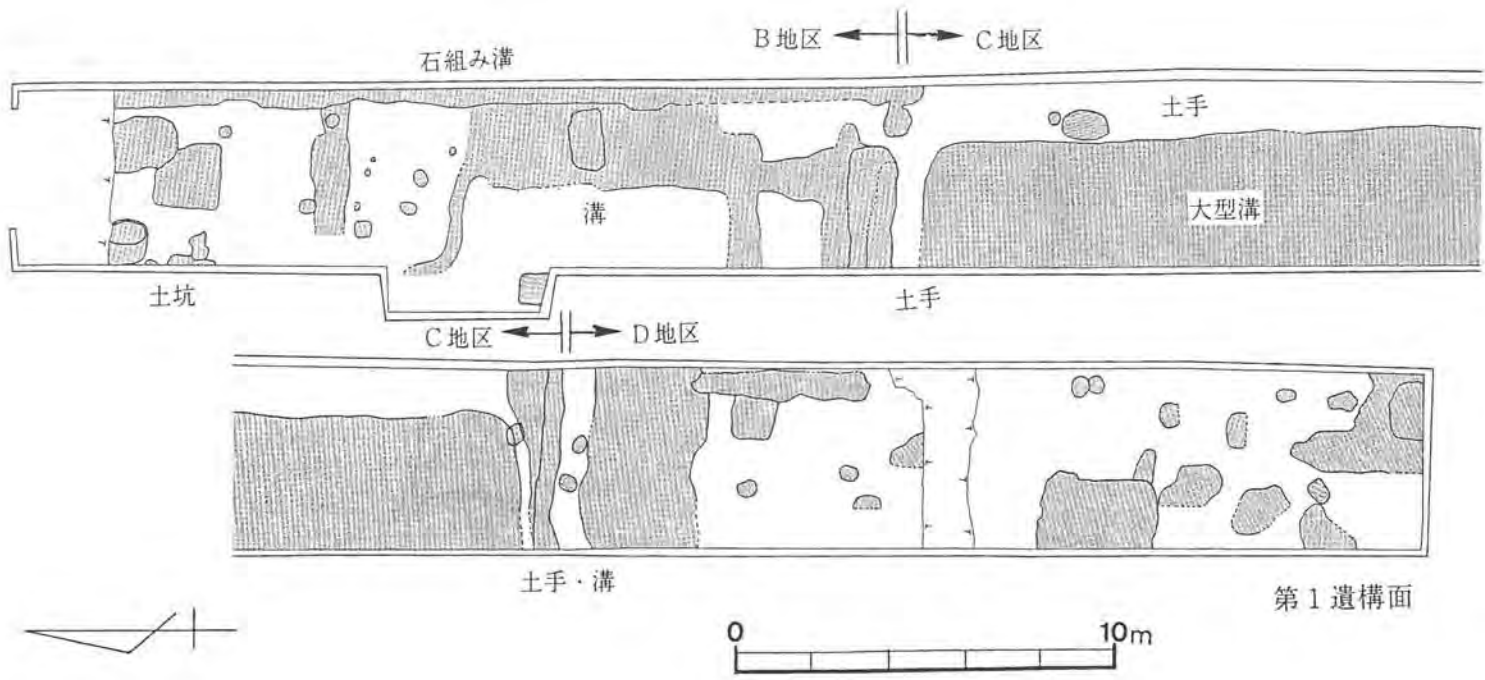


溝

溝

井戸

第3遺構面





安政年間 「御山下島分絵図 常三島」 より作成

第6図 常三島の絵図と調査地



第1遺構面全景



南半部遺構検出状況



南半部遺構掘り下げ状況 1



南半部遺構掘り下げ状況 2

図版3 共同溝
II-1区



北半部建物（門）柱穴



柱穴



井戸掘り下げ断面状況



第3遺構面南北溝



屋敷境部大型土坑 (SK04)



第1遺構面全景



B-C地区屋敷境付近遺物出土状況



C地区遺物出土状況（一部）



第1遺構面掘り下げ状況



第2遺構面掘り下げ状況（北より）



第2遺構面掘り下げ状況（南より）



C地区南北大溝内木樋状遺構



南北大溝床面および桶



第3遺構面掘り下げ状況



作業風景